これまでの活動

その他の企画

研究会
「アートセラピストへのインタビューの方法をめぐって」

開 催 日:2013年11月23日(土)10:00〜14:30
場　　所:甲南大学18号館3階講演室
講　　師:安齊　順子(城西大学／臨床心理学)
　　市来　百合子(奈良教育大学／臨床心理学)
　　兼子　一(近畿医療福祉大学／社会学)
　　石原　みどり(芸術学)
進　　行:石谷　治寛(甲南大学人間科学研究所／芸術学)
共　　催:JSPS　科学研究費助成事業
　　「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」
　　(課題番号25284046代表:川田　都樹子)
　　JSPS　科学研究費助成事業
　　「アートセラピーの全国実態調査」
　　(課題番号24653153代表:兼子　一)
協　力:甲南大学人間科学研究所

ワークショップ
「教育支援のためのアートワークショップ」

開 催 日:2013年11月23日(土)15:30〜17:30
場　　所:甲南大学18号館3階講演室
講　　師:堀口　久美(学校心理士･アートセラピスト･染色家)
共　　催: JSPS　科学研究費助成事業
　　「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」
　　(課題番号25284046代表:川田　都樹子)
　　JSPS　科学研究費助成事業
　　「アートセラピーの全国実態調査」
　　(課題番号24653153代表:兼子　一)
協　力:甲南大学人間科学研究所

シンポジウム
「障がい者の創作と現代美術の交差点
**　一第55回ヴェネチア･ビエンナーレ「百科全書的宮殿」を足掛かりに」**

開 催 日:2013年11月23日(土)10:00〜17:30
場　　所:甲南大学18号館3階講演室
講　　師:服部　正(甲南大学／美術史、芸術学)
　　出原　均(兵庫県立美術館／現代美術批評)
　　山下　完和(やまなみ工房／障がい者の創作支援)
司　　会:川田　都樹子(甲南大学／芸術学)
主　　催:JSPS　科学研究費助成事業
　　「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」
　　(課題番号25284046代表:川田　都樹子)
協　力:甲南大学人間科学研究所

第2回甲南アート&セラピー研究会
「「大切な音楽」によって語られるものと示されるもの
**　一少年刑務所のグループミュージックセラピーにおける語り一」**

開 催 日:2013年12月19日(木)15:30〜18:00
場　　所:甲南大学18号館カウンセリングルーム音楽療法室
講　　師:松本　佳久子(武庫川女子大学／音楽療法)
主　　催:JSPS　科学研究費助成事業
　　「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」
　　(課題番号25284046代表:川田　都樹子)
協　　力:甲南大学人間科学研究所

これからの活動

公開研修会

第11回KIHS心理臨床ワークショップ
「へき地医療と臨床心理学的支援」

開 催 日:2014年3月2日(日)　10:00〜17:00
場　　所:甲南大学18号館3階講演室
講　　師:岡田　憲(社会医療法人石州会六日市病院／臨床心理学)
　　長谷川　明弘(東洋英和女学院大学／臨床心理学)
　　宮川　貴美子(甲南大学／臨床心理学)
企　　画:富樫　公一(甲南大学／臨床心理学･精神分析)
共　　催:甲南大学心理臨床カウンセリングルーム
後　　援:兵庫県臨床心理士会

その他の企画

第3回甲南アート&セラピー研究会
「風景構成法をめぐる対話(仮)」

開 催 日:2014年3月6日(木)15:30〜18:00
場　　所:甲南大学18号館
講　　師:高石　恭子(甲南大学／臨床心理学)
　　川田　都樹子(甲南大学／芸術学)
主　　催:JSPS　科学研究費助成事業
　　「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」
　　(課題番号25284046代表:川田　都樹子)
協　　力:甲南大学人間科学研究所

発行年月日:2014年1月10日

編集後記

　新年あけましておめでとうございます。研究所一同、みなさまのご健康とご多幸をお祈りしています。
　昨年末、18号館の玄関口にクリスマスの素敵なフラワーアレンジメントがお目見えしました。学生相談室の園芸療法プログラムで製作されたものです。
　使われているのは、サツマ杉、サンゴミズキ、バラ、アルストロメリア、リューカデンドロン、コンファー、アンスリウム、モカラ、ピンクッション、ドラセナレッド、ブルニア、スプレーバラ。
　すべて分かったあなたはすごいです！

KIHS NEWS LETTER 2014
Vol. 30
発行
甲南大学人間科学研究所　Konan Institute of Human Sciences
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1　甲南大学18号館内 Tel/Fax : 078-435-2683　E-mail : kihs@center.konan-u.ac.jp　Web-site : http://kihs-konan-univ.org

NEWS LETTER
甲南大学人間科学研究所

KIHS
Konan Institute of Human Sciences

2014 Vol. 30

2014年がスタートしました。
本年も人間科学研究所をよろしくお願い致します。
2003年に第1号を発行してから
ニュースレターもはや30号です。
これもひとえにみなさま方のご支援のおかげです。
今後とも、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

活動報告

子育て支援としては、親子が交流し育児について情報を共有するような「ひろば型」の支援が多くの人に有効ですが、子どもとの関係に迷ったり悩んだりする場合には、関係性そのものに焦点づけた支援が必要になります。発達心理学の縦断研究をとおして、子どもの健全な人格発達や精神的健康には、幼い頃に養育者とのあいだで安全と安心を得られる関係性（健全なアタッチメント）を育めることが重要とわかっています。The Circle of Security (COS)という親子関係支援プログラムは、子どものアタッチメント改善に効果があることが実証されており、甲南大学人間科学研究所では、2009年度より本プログラム（日本語名称「親子がホッとつながるグループ」）を、地域の親子に実践しています。

COSプログラムは、子どものアタッチメント欲求（不安なときに、養育者への近接を求め、安心を得ようとする欲求）に応える養育者の力を高めることを目的としています。グループに先立って親子のアセスメントをします。親子のビデオ撮影をするのですが、子どもは知らない部屋で一人になるというストレス場面を体験します。部屋に戻ってきた親にどのように関わって安心を得ようとしているか（アタッチメントの個人差・特徴）に注目して親子の行動を観察し、それぞれの親子関係の「強み（良好な関わり）」と「課題（グループでの変化の目標）」を見立てます。アセスメントでは親へのインタビューも行って、親子への理解を深めます。グループでは、アタッチメントについて、わかりやすい資料を用いた学習をし（心理教育）、親子のビデオ場面を一緒に見ながら、子どもの行動を観察し、欲求や気持ちを推測する練習をします（ビデオ振り返り）。変化の一歩は、子どもの欲求がわかるようになることです。たとえば、聞き分けのない子どもを前に、“わがままで困った子どもだわ”といったとらえ方から、“自分ではどうしようもない気持ちをこんなふうに表していて、私に気持ちを落ち着かせてほしいのね”といったように、見え方が変わってきます。変化の次の一歩は、わかっていてもついつい繰り返してしまう関わり方の癖に目を向けることです。親だって感情的になります。そうした気持ちに目を向けて、親自身の気持ちを落ち着かせることも大切に考えます。

2012年度には、心理教育用のDVDの日本語版を作成しました。それにより、「親子がホッとつながるグループ」では、心理教育DVDを見て自分たちの関係を話し合う「入門編」をしてから、自分たち親子の「ビデオ振り返り」をしています。

2009年度からグループを開始して、2013年度までの5年間で20組の親子が参加してくださいました。毎年、7月にアセスメントをして、8月からおよそ半年間、毎週木曜日の午前中にグループをしています。グループ終了半年後にはフォローアップもしています。グループ参加者募集のために5～6月に行っている「支援者のためのスキルアップ講座」や「お父さん・お母さんのための子育て応援講座」への参加をとおして、アタッチメントの視点を子育てに活かしてくださっている方もおられます。大学での実践活動ということで、学部学生や大学院生がアセスメントや託児に参加し、発達や親子関係について実践的な学びをする機会ともなっています。

「親子がホッとつながるグループ」

（2013年度　支援者のためのスキルアップ講座より）

＜2013年活動報告＞

「2012年度グループ参加者フォローアップ・グループ」

日　　時：2013年5月30日（木）10:00～11:15
場　　所：甲南大学18号館2階演習室2（託児：3階講演室）
スタッフ：北川　恵（甲南大学文学部／臨床心理学）
　　岩本　沙耶佳・平野　慎太郎（甲南大学大学院博士後期課程）
　　甲南大学大学院生・学部学生2名
参 加 者：2012年度グループ参加親子2組

「支援者のためのスキルアップ講座」（上記掲載写真）
『アタッチメントに基づく親子関係支援』

日　　時：2013年6月1日（土）13:30～15:00
場　　所：甲南大学18号館3階講演室
講　　師：北川　恵（甲南大学文学部／臨床心理学）
スタッフ：岩本　沙耶佳・平野　慎太郎（甲南大学大学院博士後期課程）
参 加 者：15名

「お父さん・お母さんのための子育て応援講座」
『子どもの安心基地になるために』

日　　時：2013年6月27日（木）10:30～12:00
場　　所：甲南大学18号館3階講演室（託児：共同研究室1）
講　　師：北川　恵（甲南大学文学部／臨床心理学）
スタッフ：岩本　沙耶佳・平野　慎太郎（甲南大学大学院博士後期課程）
　　甲南大学大学院生・学部学生10名
参 加 者：11名、託児4名

「親子がホッとつながるグループ」

日　　時：2013年8月～2014年1月、毎週木曜10:00～11:15
場　　所：甲南大学18号館2階演習室2（託児：3階講演室）
スタッフ：北川　恵（甲南大学文学部／臨床心理学）
　　岩本　沙耶佳・平野　慎太郎（甲南大学大学院博士後期課程）
　　上杉　裕香・鈴木　敏史（甲南大学大学院修士課程）
　　甲南大学大学院生・学部学生12名
参 加 者：親子7組

JSPS 科学研究費助成事業
（課題番号 25284046）

「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」

（代表：川田　都樹子）

「アートセラピストへのインタビューの方法をめぐって」

日　　時：2013年11月23日（土）10:00～17:30
場　　所：甲南大学18号館3階　講演室
講　　師：安齊　順子（城西大学現代政策学部／臨床心理学）
　　市来　百合子（奈良教育大学教育実践総合センター／臨床心理学）
　　兼子　一（近畿医療福祉大学／社会学）
　　石原　みどり（芸術学）
進　　行：石谷　治寛（甲南大学人間科学研究所博士研究員／芸術学）

「教育支援のためのアートワークショップ」

講　　師：堀口　久美（学校心理士・アートセラピスト・染色家）

「障がい者の創作と現代美術の交差点
―第55回ヴェネチア・ビエンナーレ「百科全書的宮殿」を足掛かりに」

日　　時：2013年11月30日（土）13:00～16:30
場　　所：甲南大学18号館3階　講演室
講　　師：服部　正（甲南大学文学部／美術史、芸術学）
　　出原　均（兵庫県立美術館学芸員／現代美術批評）
　　山下　完和（やまなみ工房施設長／障がい者の創作支援）
司　　会：川田　都樹子（甲南大学文学部／芸術学）

「「大切な音楽」によって語られるものと示されるもの
―少年刑務所のグループミュージックセラピーにおける語り―」

日　　時：2013年12月19日（木）15:30～18:00
場　　所：甲南大学18号館カウンセリングルーム　音楽療法室
講　　師：松本　佳久子（武庫川女子大学講師／音楽療法）

写真は松本佳久子先生、12月19日音楽療法室にて

これまで研究所主体の「芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究」では、芸術学と臨床の現場からの両方の立場から芸術療法をめぐる研究会を重ねてきました。2008～11年にアートセラピストの実態調査を実施し、さらに叢書を発刊しました。昨年度で5年間の研究プロジェクトは終了になりましたが、本年度から科学研究費（代表：川田都樹子）の採択を受けて、これまで研究所を中心に行ってきた研究会を研究メンバーが引き継ぎ、今後4年間をかけて研究を深めることになりました。これまでは、芸術療法における創造行為に対して、その美的判断や治療がどのようにしてなされているか、ということを10名以上の専門家たちが、ひとつの土台で対話することを目指して議論を行ってきました。しかしこの方法ではテーマが漠然としているうえ、対象へのアプローチ方法もそれぞれの分野で大きく異なり、芸術学と臨床家のあいだでの共通の着地点を見出すことは困難を極め、平行線を辿ってきた感も否めませんでした。この困難な対話についての成果の一端は叢書14巻をご覧ください。

今後の研究では、芸術学と芸術療法の対話という大きな課題に対して、それぞれの専門的なアプローチ方法の個別性を重視しながら、1）インタビューによる芸術療法の歴史の再検証、2）芸術における病いの表現、3）京阪神間におけるアートとセラピーに携わる人々のネットワーク形成、という課題に主題を定め、それぞれ異なるテーマに即して研究会や調査を進めていくことになっています。それぞれの成果を持ち寄りながら、ゆるやかに芸術学と臨床の現場が対話することを目指していきたいと考えています。

本年度は下半期から、新規プロジェクトに取り掛かるための研究会を重ねています。11月23日には芸術療法の歴史を掘り起こすインタビュー調査に取り組む前段階として心理学史の検証やアートセラピストの実態調査の意義と方法について議論を行う研究会とそれに関連したアートワークショップを、11月30日には障がいをもった彫刻家澤田真一のヴェネチア・ビエンナーレ企画展への参加の意義をめぐって美術館と創作支援の両方の側から探るシンポジウムを、12月19日には少年刑務所での音楽療法の事例について、実演指導も交えて伺う研究会を音楽療法室で行いました。それぞれの回は上記の1）、2）、3）のテーマに関連します。

紙幅の都合で、それぞれの会の論点の詳細についての報告はここでは控えますが、いずれの研究会もとても充実した内容になりました。個人的な実感としては、近年臨床心理学の分野でアセスメントやエビデンスの実証が精緻になり、症状に対応する臨床の方法が多様化しているのと同じく、ここ十数年のあいだに芸術療法のあり方も現場のさまざまなニーズや固有性に対応しながら理論的発展と多様化を急速に遂げてきています。同時に芸術界のあり方や芸術に求められるものが変化してきている部分もあります。11月23日の研究会で市来百合子先生は、米国の芸術療法ではアートに基づいたアセスメントが発展していることや、芸術制作の結果よりもプロセスの重要性を強調されました。そのような現代的な視点を念頭に置きながら、心のケアに関わるアートが、どこから来て、どこに向かっていくのか、今後も検証を深めたいと考えています。とりわけ京阪神を中心に顔の見えるつながりを築くために「甲南アーツ&セラピー研究会」を立ち上げ、月1程度のペースで継続して議論を重ねています。ご関心のある方は、引き続きの注目と、kaatsg@live.jpまでお気軽にご連絡ください。